俳諧御傘　七

特別
へ5
6041
7

誹諧小筆

雨

雨二　誹よりは雨中　雨天なと
詞よ続く物をも入れ
よしや

さめ　只一誹よりは小雨　春雨
村雨　白雨といひて二
ある也　又春雨　詞のよしむ
白雨もし村雨とある人から
も春雨とわかくも二またれ
心るから　きうらしく詞のよしむ
時雨　村乃空よきうし　次
あり　只一誹よりは二ある也
あまりは雨乃外なる也

56-4080

曲と あるいは曲を持つに あめ
あるいはよ さあめは七句をきとし

松風乃曲

其乃深ふの曲
川舟の曲 淡路
曲定めるは淡路もの曲の
外今二組よりあるべし淡路よ
は二句増し淡路なりて曲と
あるいは曲と定めまでし さあるよ
七句定め なるめ増めも 同前なり
うあめとあるべし曲三乃同と

文月乃曲

又三乃曲 村雨
乃曲も定淡路
と見れ此曲三乃流もしよ名
乃付ける曲は曲乃字ふは三
句定むる淡路りなりて二句さ
るわ

あさ曇

仙台淡路よ
あるい次天雲と
閼伽結ふ 多の出し見へ露し
梵語にして水の事よ 梵語閼伽をさ鬱陀羅を
まりとし水よ閼伽もあるべし
水も同前なり 不可山村と経也
今案ずるに涅亡叉羅種那し
て云 鬱陀羅しく同前なり 然
文字ともあるぬ文字とある
略はあるへし 摩訶といふ
字は大の文字よ 梵語をあれしお
乃たまけまりし同前なりよ略
なし 釈迦といふ梵字なるを
能仁と梵語をあれし仏乃御名
にあるべしよ此曲まいは経の

字なりとも仁乃字なりとも姫ハ
かくし通蓮葉と云梵覧経にハ名號
乃字よ親しくあらはるゝ道
蓮葉やむをあらはし人より出現
なりとも可山麺りしつかはすると
守ル秘以来字出家をもとく
初く廻らし志るしもそへられ
らん待きそゝ經し東叉すれ
を縮也乃経員の本尊を次
ある人閼伽水と云ふ閼伽名ありとあり
乃水と云ハ重宝とこそ見
得るら閼伽と以へて秋菊よ
なわれと汁い人て秋菊よ
あかし次太き旅露らめぐと
と兵へき波あし無く人て經験
まこ河の家と云ふ壇ハ水ハ一切の

字の道をききよむりあのみと
と日本紀よもあかりし利
水くよみる神社乃壇よ宣
て神祇よるれも瑞籬とも
出家の通りきそゝ次ば根
元を志らさ波あよ其乃字流
財くとも去麺の淋浴すくく
くなぎもとれを来通りハ
きくし次とも水乃字よあハ
二句を入へし閼伽乃本ハ続散
笥わく流よ天竺よ片待これ
をあ流字くく同じく次るりよ
得るし閼伽寺ん水とのく宣
去被へなよ義も称し閼伽よ
水とる見しも洗あそ云年
あ水といふ次や菊らやさまん

春別に暁よ歌て合点ゆう
ぬ今よいふともわくまゝ絵に
くらしくやうさ吹くとも智恵
あらんとさくれあらぬ下
洒落霧雨雪霰　如此独排
なれ二句也
まるわ
嵐ふ年二句乃嫌と吹きし
新式の詞なれ排よい嵐
三句もへし山帯の時嵐な
と教よりひくも三句去内
たれ又嵐山なれの名なれ
西とくく三句乃外よまい也
吹なけしきよの詞を入
て風体よあそく西家句
ありとも一座三句乃外也

是对な松と可山風体の句
よありきな風乃字二句吹
乃字去乃嵐蝉　荻乃声
扇子の風体乃詞よいとう
も嫌ふ事なし次
鉛乃月　只一句乃字合とし
て鉛時の月今一
遠よきもの云てあり
排よい鉛乃字のへくも二句可
宵白雲一流鉛なくも今一句
とも鉛と可宵は亦よ月の時
残る東雲乃月追加しの
後よ続る月なるの鉛乃字
と鉛乃字合なる月今一去ん
あるとい流きも松と嫌なし
夕月洞前

秋寒 夜寒 朝寒なとハ
詞ハうへつくも只一躰
にかゝハらず秋の季にて今一き
度の義なりて秋乃詞にかゝ
とて数多くらへなき文字を記しかね
されハ 朝寒 夕寒 肌寒
寒さの詞なとハくへ二季へし
秋乃月のさゆるとさやか成
なとハ冬に別にあつかへ秋
秋乃さゆるといふ句あれハ秋
乃月のさゆるハ不付たる
なる秋の詞なりてハさゆる
月を冴月に取て秋乃詞
のつく月のさゆるといふもさや
か成なとハ秋のさゆるかに
可付事なり秋も冬もさき

氣に新に月秋乃寒き冬の
寒さも秋の冬きこゆる寒さ
こゝやうて打絡まて冬の物数
にして秋乃さゆるとは詞なと
てハ秋乃月成月さゆるとに
あらへし冴とも同し

暁

暁 只一其 暁一躰なり 暁二其
暁一物と嫌ふゆゑ三句
去る事に候て数多く兼
三句乃間にさ暁を嫌ふ
あし次暁とも只暁を嫌ふに
もあらそりも二句嫌ひ嫌ふ
とは嫌ふ事嫌ふあの不事の
次ニ書に待を暁ともいへ
弥勒乃出世 龍華下生なと
あるへし

野風　只一野乃風一役ニ用ひたる
趣なるに下段を代二句
之野乃風としてあるへし次
躰にハ吉ろ風と賦るに續く
やうに

野乃萩　と書かれきものあ
発句に永き萩と云
詞も物にハ不可用

あさがほけ　新式に非二對二
所ニ嫌ふ體
るも院に鶴乃字ある詞を
河の歎あるくは非ニ對ニと
あらそ體るもやうな時
他に不審しからの打ての
あらそうや二條為世卿
老髪あらてやもおぼつかな
ともかくけ至開の字を
ひらきしと云事ぞそひふへき
乃本意お道乃がそ花をき
のひらく所あるく萩乃ゆる
物なり

遠慮　二嫌にハ三あり
星の世ハ心かて綴

乃明　連よ二あまりて嫌に
ハ去をそかへくしと云へ
しあさきの名乃ある明
蝋燭乃字明は三一句代用も
焼物乃時ある聲ふに不嫌也
明ノ字も三の字二句連なり嫌
有る晨明と云字を出るて
物乃字にハ五句ともあれと
嫌にハ三句去てよ明なり

あるを不易けさあしさハ
不易なる明乃姿なるハ歌なるこ
へなる非ニ歌なる明よ月次の
月ある二句を尽し歌ハ此月
よハ其句を尽し錬此月に続
前よ用し句よハ勢なを白と
星よハ二句を尽し

明なる　明を以て明を詠まし
詠明に又明なるハ二句なるわ
明も色をあしもまてもと
明を詠まし次を示ハ歌なる歌の
明とかわも歌なし尽されも
云言様よ明を詠次とハ
て歌なよあしまかなを由り
ともハ明を詠まし云詞歌なよ

あるさ歌をも詠なくともハ
字さへをそこや歌なよ
あるとも此分義なるわるも
歌なるも新式よさやうよ
出義を只明果く明なるくさ
計のきくとけるとあわやう
乃義く明乃字歌なとの事
さうるが字なれたされを
歌なよ詞くなる詞なれを歌
なるわもるがくるう有り
とのへも歌なとの分と作
理をさくあるくがよまる
とも字さへも歌なとの
分とも云ハ道理なるすまる
分ともなれ思とも云ハ裏面の
和遠なれも只あわやうり

されバこそ〳〵なりける〳〵ハ
報ふよりあるさだめし　されバ
先の世の果をも現世とあるハ報
ふと四時の事をも当時生業
またよりまたる貧乏なる人の不富
をよびも義あれバ永き日をかさ
ぬるとてもひとくも善にあれバ
自しあらぬ報とてもひとくも
夜まなるわかならぬ報も
よりの清さきこふハ勝によりハ
次といふさ清るの悪身ハ勝なり
あるなりしきりの気も清さきに私
因果なれを明果ひを物果悪
よりふもれよ報ふをの所へ
かき類ひよりしとおりよ人
なへし気あらくめならけ

座するわざなく類ぬ日と
いひくも其小欲ハ永日出庭
とき句ち善秋の事を知くる
綱なら観よ其肉みくとも
ひくも句継里をて人ぬるに
又もあき永日とるよりて
めぐりし経報永報因果文
清さき身しる句勝よあり次
と定くさよ清ならぬ身と
いひくも勝よりしぬハ理之
今ひ明果なり　明果悪と云
ハ綱わく定ぬり所し合よ
ある次其心わく定くる去
悔やりなるわぬとへと恒とぬを
ミぬ所とらへとぬと悔ぬと
ぬと座りのうちわめぐり

梅をぬきて香ほりのしぬを
まぬきれ給ひしつれ㒵よ
そこるらん所しくしめころ
そこ花のふあくはちろわめ
をなまみ尽し又問ふ志てしい喜
るまく秋きくしらてもまよ
殊暦よたし侍ろ由 喜ふて
後も二月尽九月尽の日も
いそ侍り絹く出もと夜きたりを
まわくに絹よおし次喜二月
殊二月尽もさ白数乃ありら
く侍りハさるれし一秋の明るろ
明るおぬともよハ大きよりら
るめくまくい分別おるへし
明よ曙 新式よ打越可止ゟ
梅乃夜よく嫌せり

是ハ曙といふ字一字ある句よ
明乃字よ打越を嫌ふと云り
なりあ字ありのも明乃字も
皆嫌ふし名云明時ふ夕時ふ
りハ二句嫌へし 明るく 明
離き 明果くハ嫌ふにあく次
嫌ふよあく次といへ是明乃字
ハ明時ふ夕時ふよハ打越を
嫌といへり
明暮ふ 明時ふ夕時ふ嫌ふ
是まきくにて次 あ嫌
乃字よ明乃字暮乃字ふよ
夕の字ともふ二句さるへし
あく侍りよ あと 二句去
なり

鶴乃小　鷺乃字二句去し
是も時分にかゝる
さ有り　あき　くれ　のこし
あけぐれと　いひく秋の暮月
ホ一度くらを
秋毎あらも秋分之　鶴時分
よ二句　又時分よハ不嫌也
時をく文字をゆる法るわ
明の字よハ三句鷺の字よ
る不嫌くゝきよくれ共二
句と続きてと見れも編句体
事之ゝゝきて鷺と文字
別之様よあけぐれハ鷺乃
字よて嫌る理なくも此し
ひかよ昨鶴　此鶴　每鶴なと
と数のよ續くへくかゝりよ

此上あさいは清書も面を嫌ひ
宇面さ　あしさよハ七句去し
宇面さ一二あれハ
鄕よハ早旦　明旦
あら無一
今旦　と鶴未乃月今一加く三
句あるも是ハ無ゝひよ於と嫌
なわあさの字よハ七句去し
天乃字
於よ一清くあわく
右句乃相るれとも
鄕よハてんと数のよ續くかめ
あまよ面と去此上一座文句
乃相し　あめ　あ雨　てんの事
も面と嫌し　天よ　あまの川
銀河とうけも面ときらふ
又句去りると連歌よ云あ
り稀くを待るさやうの事也

乃文字を詠く去嫌もきらえ
さらぬ月のことおもく物合語
論而名なり天の川なり
うきわくいふやうるおやう
あわ佐冨乃筋といひて
鵲にハあるしまえ句の内
にハ名ふえし七夕の事なれハ
秋ふえ天上乃事なれバ
水鳥にハあらす次句ゆふ名須
身橋を読ひても非ニ水鳥也
河内乃天河なとハ秋ふよ有
鵲を水鳥とされも七夕乃
仏ある句なとも秋ふ為る之
しかれとも水鳥ハのぞ
為く次あめ あすてん
等の字ニ用ハ二句さらし

新式ニ従ハ 鶺鴒ニハ似たる案あり
題めされても差別をおもふわ
あまるへも あめて降る風
須磨二月乃事おもひ度ら事
おもふ云ニハ二句去へし 本天
大事 そらのおそれ こそら
こそらそらハ そら地名に
あるなとも そらハ清事
の字ニわりも 天乃字ニある
し 鵲ニハよくく 吟味しく
あやうの事ニハ面しそきらう
も次しもせめくる句ハ嫌
為しと云ひ 詠うされとも字
鴎丸の空を為ふ文事ニあら
されとも其庭乃字ニ追次ニ
し詠へし 又事ハ 天乃字声

に讀ともニ句去べし 但天象
天皇 天間なとの天に八付
てハくるしからず 次天人 天乃方
なとの皇の事をいひたる 天
乃字に八皇嫌二句也

あさ霧 雲霞なとへ
打と煙霞猶にの
る踏歌十六日 女踏歌なるゆ
以上根元 年中の事なるよ
くり

曙

誹諧にハ一座二句あり 曙雲
なとは数寄にいひくも二句の
也又嫌ふべし 鶏明になにも脱し
曙におのくのなのかなとニ
句嫌也

朝日山

明ぼのにきらはるゝ次 天象にはきらはるゝ次
句縫にて嫌也し

芦 水邊之植物也 雑之 芦火
非水邊 秋ならし 非植物
種に加る名枯下萠なとの
詞をいへるは植物 水邊にニ
句さ芦の種 綿も植物なり

芦田鶴 水邊にも植物に
もあらず 次句もなし

縫にて嫌也し

芦鴨 水邊之名之植物に
ハあらす 次も句嫌に
よりく植物にニ句之 あし田鶴
縫によりく植物にニ句あり
あし田鶴 芦鴨 水邊 大

事の秘傳あり連歌にかう
よりひとく芸乃字一座に
三句あり誹諧にハ二句と数ふに
讀みく今一句去へし清水を
認めく但句乃捨し又み分家
乃芸作を別乃気かわらぬ也
連よりも誹諧にも世乃わけよ
通ひ入ある今一句あるへき
の誹芸乃字を植物に用ゆる
句をもハ芸世のわけよハ不許
有

温日与宗　日乃あたる
とい天深とよ
可分芸二句去新式無此

青小緑　二句去也

青海苔　青乃字苔の
字二句去し　此詞
但三句去に移すへし
前の道乃大秘なりけれ
ものを精を尽すよりあり
さ行く二句去と心得へし
思ひ出ら

淡緑　山緑家緑なの紛らは
乃緑文字連すに文句
なれも誹にハ三句去也　乃
字にハ二句去也又道乃字
もり出よありし中道
実ね道家の具なもの
数多より時々に付くる句も
なく付但数ハ是非をとも
判者のたての字なりとも

滞滞には示背溜同字を吟
みまちがふの人多し滞滞
と云名は誰もしらぬと云
謂をこゝろへべし

あんち滞渋滞渦山　国名
またし山数多くあり　非なり
也

あし海よ　是乃字新式
乃今案に不
嬉したとある役背拘乃謡よ
あしく元代の二句嬉るら
九おとへしたる　あし海と
ら字菓嫡と書と蓋の字
む滞しきあまり續とゆく
えの字と消息などに古

筆の出来ずしてゞ女あんく
と代乃人まで乃字の人ある
座りよ出ると海へあし海
あし海をと云ハ背の字乃
ふるべし蔦乃字乃仏ホく
いひあしと海乃洞しなき於文
また結ろしく書くらも元
あわ元ハ讀ると同じくぶり
元より書して寸之の字を
出とく背よきして結の
字ともますまよ嬉へおろさ故
をいますらませなしと云り
付く彼人なし筆者乃書
ふぬる事しゞ後よいくらく念
決よきへ文字をさん何かく
ということ續し決書よ其るを

嫌をせんとも詞なきなれハ
その字のみを筆々を去て
花を前句乃合案にいひて合
付句に付くものなりかなへ
かくすとも存もの也当座乃に
その字の道理ありてそれ二句
嫌ひ所に有て理なりくハ不
可嫌

東路に　東屋　田舎ともいふ
文字ハかりを続ともいふ
連にも雅にも物とり抜する
あつまの字　東屋とよへくも
連に二句乃内にも隔とみえん
あふ雅にハあつまくりきらふ
云と察今一のくく二句あるへ
き歟又あつまにひらし物たる
嫌ふ所也ひらしらくも杜
宜もと可嫌雅に東国関東
坂東なと数ゆるまゝあつまの
にもひらにもわたと嫌へし
ひらの文字数に読くも
あつまハあるへから歟　あつまの
ひらしさう讀数のみ合四句
わたるへきり　あつまらく
ひらく　さうらく本字なくハ
本字有は同二句いは隔去
又ひらなる也あつまのきらひ
嫌なし又東なる東方朔東
雲なとの字ハひらに二句
嫌へしあつまや　あつま遊ひ
等乃和縁に付くもくる
しの次なれも又あつまに

すゝしく白のあんあくさ
里は東も鶏とあらんと人
乃耳月はさまに浄魚汁まいハ
六ミちらしと大鮮酢なと
組稽合はあらさ待て大白
汁鍋とて不許ト昔

あられ　越後　藻塩　和布
よお越を嫌へし
名残にも二句去ていはまにも
付くいふもしかくせ次

網（あみ）
字まて組立網乃数ハ連よ
わたる郷よハ面去まて去れハ
長ふ乃網乃事してさも
乃わしるいハ字去のわく

霰（あられ）
其一霰もつまて一霰
打氷一しもかよ餘也

わしまにあわ浩わとか絡る
なわわしま地乃錦霰登
錦のわしま一管離なわ

網代（あじろ）
みしゝ冬遁て生類よ
お越を嫌網代ハ氷
あしろ木を掛ぶ事しゝ冬
氷魚を氷消さ引ゑて
歩よ成しわくよハ連よわを
きゝへし桃よハ滴を嫌へし
志ろ乃字ハ月代ふ網代ホれ
わと嫌て編りハ網をこ句
きゝへし網代ハ二句嫌て
網代屏風　網代の輿　網代車
ふ遁よあしふ寸雅を生類
まきゝる次突の網代よ
わとゆへくあらよ今一方に

網代乃床居所に二句也
（おりし）折石　歌の名なれた何也
赤乃字に面と極明の
字にハ作くきくる次を
赦ハ石乃字左出るもい乃
字を略し為志と計ハへて
早ふかも為せす又名所の君
なれとわかも石乃明らしさ
新くも無さ石乃あるま赦
に付くる名なれ石乃字
おりなき赦に佃くいかなる
岩にハ七句まで極にハ二句也
無し但し道理なやうしも可
煙義なりしわかも石の為
らいに字をく極て石の字に
許無く岩の字不残りし

ハ一句まで極ハ二句まで可
鍛冶ハわか海ハ海う或鑿（さんさく）
ふ纏絡しかく成く雁の
奥さうなる紀るのし明石まで
景為曲にあく次山彩し
（あさま）浅間　山とるけまでも山彩
（あさかり）懸石　未之正月十五日除目
乃事也
鮎　為し為鮎ハ未之さし鮎
わら鮎ハ将も鮎のみて
未く千鮎その鮎ホハ雑くる
連に二わりまふも排らしき
書伐の人なとの三寸為らう
鮎のまくのなし雑し鮎わく
なとまし

秋之夜　但し七夕の翌なり
朗詠乃詩に云秋夜
寒沼とともに秋風の延
乃ちなみもせ七夕乃事もし
扇　秋之納涼なる風情に嬉こと
扇は夏の用る事の如く風
よりて秋合なれそれも納涼
乃風するハ同じ事なれど扇も
夜の事を指すよるくし風情り
嬉しきを式やせたせ扇もふ季をと
ますまつく秋のたちやせハ風よ同
秋する風も人をよ吹く
夜乃梅よおもし秋すれ遊ぶ月
秋はよるも人の春もとも
人知るれ秋夜の気持すく
ちれよまもく夜の播り

あつるかけし又扇をあきる
捨て但句様く新式よあれた
句様をゆるもて宗匠道末代
よ見るなと加待極おる見きき
ある事し云字きへ句中にあれ
も皆捨よも同くな秋たる
又扇ハ一座よ何句の物と
云はは新式よ見し次加り
郷すハ扇一つハおり一も扇
乃異名ならは扇子秋のなど
と数よいふく又一つ上折を
面く云ある也しうちハおり
異名かハ扇二もあるへし
扇綱も二乃内と秋劒月
あられ秋よそつ扇はよろく
如乃る園乃ましも未いふか

あふきを翫世に前の句に扇
は彩雲の影はゆらゆらし
かはかりて蝙蝠(かうもり)の羽とほと
いひ物なれは扇の名の附
生類よあり次にて蝙蝠
と云句あらは右の扇あり
なり次 唐ん如くてうち致
よあらは行とちくかはかり
乃扇ある人し班女か團は扇
なりんは皆團きを用ゆれは扇
なし 團行ときは如扇二
あり其團扇と云文あらは
團扇とるといふなとは文
あることあれはとらぬ二句
乃揃ひ扇ある句乃揃ふあれは
扇と團根むかしは門前なは

行なきは如とはいへとも扇
之乃外よ團二あまりて面を用
なし團も夜の納涼なれは風
様よきかた次第にきれは
物之經並扇あらは並團にも
其外乃字揃の字付句を用ゆ
團扇と数多きに附るも付くへく
わしかし次
鉤簾(かきさし)
わし 付ときさし又鉤ことかまへ
わした鉤字さしと
鉤さし簾は清書にも名をくし
湊首(あくゆふ)
ゆかれしあるも雲なし
云さ付てあくあるは清くし
てもあるし物書て門前 雲母
こされ乃消し書なしてくれ

雪と同じくいへり　まことに
雪と云ハ霰ふれりともいひけり
見えとある雪　物ゆゑに准し
ニ句浅茅と並よるハすなく
言葉物よりも季ゆゑあるべき
雅をとるまでのこしうすゆきも
同じ事也　うす雪こそ冬季に
ハ浅く世ハ其ゆゑに准し

あさぢ
浅茅　雑也　浅茅生ハ春季に
二句なれども雑物也
ちかき二種あり　一ハ茅草に一
ハ千種と云事あり　茅乃字を
くハしく見つれ千種の草と
も書き込に二乃字あらん千草
とくハ万乃草仍称く千種と
云ハ草によみ侍人ちなみに乃

ちくさふくよめるハ多しと云うす
浅茅のちかきをくハ雑物也
茅のや蓋ふハあく次上茅をと
云とや又ある説に　ちかやと云
物あるにありなむも雑なる
又茅と　ちやと成云もいつれ
あれそちかやハ秋成し　ち
まれも雑と書き非雑物ニ端にも
見ゆる也　但茅乃葉
ときうくまき秋の成にて
まくともちまれともきれハ
茅の字にハ二句可通歟
よハちまれ一ちあき種一ちまよ
ね種ハちひ物によく次さき
とも草によみ何れ物さん歟
のちまれのとさまくるとさ粋

とかしく今一句あるへし
芽の躰植物と成ても法
湯神楽なとくへに超すなたり
八九春之植物なら此さみに同
芽の字植くより外にくわよ
一段あるへし部式なこともあり
なきに立を植よいわく次第に見
よるいかりかなも字るれと嫌う
八句の物と付

檍小（わさらい）
釣乃字皆古く不嫌して
又是も部式に不嫌（ゆるき）
乃よしあれと二句嫌ふときも
あそらい奥の字見おわしたの
ふかまちら形しまる句うしい
あるる乃字ふも可嫌よし也
小汐法わりゃに不及其くわ

なき次ても釣乃字に二句嫌
とハ可心得一開も橋に花乃字
きらふぬよ槿釣の字不嫌ゐ家
乃名おも流巻も橋もて花る
る時も一切の植数なを名し
ていひ槿ハ咲くらおしたむり
句くの名ある名るれと二句嫌
ましむるわとあるへし

海士小舟泊瀬山　舟乃字に付く水辺
小可嫌く部式ハひるれ共海士
小舟よくる乃月ともに枕詞に水
辺よて嫌ふ

東遊（あつまあそひ）
神社なく又まるれハ
神祇にたる也

温 日のあたゝかなる事ハ可は為
春なく折式りしぬひのもと
分をは只あたゝかなる事となふ
くわるを雑にと云んぞあなく
物によあたゝかゝと云詞いをし
をへて春よ限とい人りそは
無理旅治し綿衾人のたゝ
へ飲物なひ物なとにあたゝかの
事なとを云詞なる不断なる事
なき事りし定るなりいたれとも
新式よ日の暖なりと出ゐる事
あたゝ雑なるもされども世上乃
暖気なりを春とし定ある様に
きつれそ天気を風水世上野
山なとのあたゝかなゆる春なる
事し人なれ懐寝遊懐中
湯茶肌着足 足袋ゆけ
なとの温ハ雑なる無季なり
類然なれ連りいくもなくも
さなる様に俳諧よハ新式乃古法
可用事なれ あたゝかなる事ハ同前
須をあたゝかなるハ雑し温なる
日とも宗と二句去と新式なれ
打越をきらふ無論物の外に
温日小も宗 涼よ冷 寒よ
冷身よ春むよ寒いぬひなる
昔なとにもわ所る気の神く
くなのに打越をきらふなとこ
中今ハ温日よも宗なるらを
きらふ無によあたゝ次暑涼冷身
あつむるも無し句の連も二句
去と連俳なよ又くゝ無り

新式の定を出せしハいつれと
とらハさりし数十年ねをに
俳諧これ迄もかはれる計を
俳諧もすくなく廃りに成来り
俳諧さへ漸々しらくるの
なかりし事諸々も至俳り
只こち庭乃宗匠次第小俳諧
せる事へなる丸くく定
分別もて俳諧よき代の説を
無理に新式の定乃ごとく温
日よ出来るりを二句嫌ひ
ある暑寒涼ホの詞とい
きくもぬら続しをよきき
流よ涼さ事もの新しし寒
涼温熱四季の気乃かハり
百き乃事たるを混

難しく嫌ふんかくして喜びく
云は秋冬と云字も時節なら
新式乃きらひ感ハ同意と
をいひあやまり日乃温なる
と出来る時と同意なれ
寒さ冷しなど言ひしむ
ひやゝかなる時も皆同意にて
出来るゝは暑さ寒さ涼
なホ熱ぬ各々の趣し
きらひ候へとも言ふ涼さ
兎角道理を無理に申
されば気よりしのす寸気ホの
同しも涼しなどは暑と付まじ
も同意の成りはおもをあれ
と更よ同意はあり候涼しなど
と云は夜を思ひやるゝなる

こゝ風と一にハ俳諧一涼に暑
き衰表乃調へ隠しハ思ふ
句執に至 世ハ離れ乃数多
俳可け俳諧ハ待ここさへつゝ
て付くり作りし作へし涼
涼に冷ハおもしろくおもむき
き俳しなに冷え清ふしむれる　を
涼しさの深成く別乃気に
なれあれど風ことにハたまる
きるべしとく分別をとへし只
武国乃為を悔ともろく末代
乃思ふにもとのもれ恩指
に悔るもむ色かなもし
あるし　ぬし人倫なれ
無き翔ふかぬる
非人倫ともてまり花を

あるし月をあるし人倫
にあらす花をを友月を
友風お花乃あるし月の友
俳諧稀て為人倫花乃友月
乃友ともいハ花見ん月見の所の
友ともにし人倫なわあるしに
よの字二句あし

秋乃田

形式に打越を嫌ふ
植乃中に収乃田あり
くわ専く打越を嫌へし
治定しくとけると代植
植に不離とさしくて無き
なくにも非二植稲と営て
まんをも植堂をも所に形式に
収田乃中田に為康と加く八
植稲に一句不可嫌て康近をと

わりも可ゆ嫌之くところハ文字の
乃四方を邊へあつと見へくるわ
躬式のんなる國ハ離なる躰乃
四ところ多く躰乃字になる
為康ることを面と結ひのくハ
様稿よりのすところまてそれ
も康と長へることありハ様稿く
ところ文字之躰まん國とれるけ
まと康為ることを含まても書
る躰乃国之ハ下出ハ躰乃國
と云句よ為康を結のくも
様稿よあり次と云義理なれ
あり次もく見るけ様を
為し

朔月日（わきつくは）　又月日　月日ハ
寄之嫌く従躰乃

月乃はじめの日を朔日の説もあり
ところ朔附日と書之躬式
必ひとつの書よ附乃字を出た
ふりく月よハあり次朔乃日
又乃日と云説をもちふる世のん
人皆と云ひて吾字様ありし
月ふ不嫌く書たり躬式
乃小出いよく西説をも知るる
とよ出付く毎々朔れ是をも知
毎乃説様ふさハ月日よ为ぞ
嫌之くとも文よありハ附乃
字を書事ハ臘（たん）ハ万葉集
よ志るあひ乃ゆらしと云よ
白緩とる事るとかくし縁の
字よんあり附乃字も同之
朔月日と云ハ朔日抗あるる

もろこしに月乃鏡ろうとらふ
き給ふよりく鈎月日もろ
一ひかり墨なと硯調におきりも
月日の二並(ならび)ておきすみとも
事之夕月日も思之志つれ
謝ふ六鈎月日夕月日月乃字
かも日乃字すも三句嫁人
ある之鈎月日夕月日清秋よ
なりく西の月とあも是正
読之難ひあへりし次

秋と梅　五句是

菖蒲(あやめ)　五也もら新乃菖蒲
もりくの菖蒲乃
読も蘆乃菖蒲の興ハも清
五也たまんはまん名のあやめ

やまへ之非二五也
浅間(おさま)と　えらも山影も
あらし風年　是
天飛橡船(あまのいはふね)　二名字　出岩五とも
同しまままの
非代よありし五之読く除し
五也よハあら次非紙ろし旅
為し船の字よハ五句是
天河乃あふ瀬　新ふ之意よ
あら次五を
結ひくも非五也二七夕風も
又河内乃名所よ天乃川是
是ハ水邊之非新ふ句縁を
まつく可雲の方之結河と

虚天乃字乃きこえあり
なかれ草乃紐帯と数多よ讀句
あらそ天乃字よハ不絶紐
と云字ありハ婦へなよたわ名奈
乃時も紐乃字なと書へり次
志ら乃海 名有も國乃名ふも
きし海抱なる乃海
い流も同名よ國の名ふも名
所ふも継よハ二句詠く云之
粟津乃原（あはつ） 粟津の森 粟津
乃里 清水 名也り
あら波 同云粟津と詠ゟ名
邊波 多云句海名邊や又同
志られも大津も名邊波 著云
同名津乃字海よ付ゟ詠
文字ゟなれも 此名去ゞ菓以流

乃不津奥列乃会津（あひつ）なとしれ
郡の名ありくしるも海邊
よありて稀え名邊よきくえ
さ隣へ
逢坂（あふさか） 山郭之関も山よあまた
もし山郭之云言りれ
合多道と云所もり逢道乃字ニ
二句去と作わ 花名前とゝ
よ懸想王乃字ニ以不ゆく
為あひゝる所よ逢坂と云と
日本紀よあれそれの字ゆりハ二句
去なし 合多道の二字よハ三句
去へなし
縁乃葉（あたくえ） りく絶乃ん さきの葉
とひゝく所ふ木の
字ニ二句嫌なり

秋乃涼し并に　秋のあつさをとく句作

くはしく云はゞ雨中もよろし

く涼風も吹かばよろし夜寒の秋

句よくしれる秋の月の照り

海士風呂くゝ女は　火ニ焼けあし火縄

生きてくるしき事もしく文字

かこうへし

消息　文字も様もも二句嫌ふ

前の題も見えなき色を

新式にてよきかなる消息を

正字ありとも乃字様の

字と二句とはなせもの様正

字たる六條の家のきまりの

仲殷橘殿にもみえたり消息

えゝわま義をとらして書

に書ならぬ文字之薮と草の

字村の字まて二句嫌ふいろし

家ありそれも薮乃字正字

や和語にて正字と書座の義を

とりくあら数多し秋あわ

ひつれも一二字にて意を取分

別ありん人の结合点まても

小ならぬ蓋乾乃字は海にけとる

数蜻かの字の道のとくもそれ

隠れし書聲の字と正字に

用ひと喩ても萬葉にて金風

とかく颯風となりて十六数

とすく鹿乃声とよむる類

風と松乃字まて二句嫌ひ条

と生数まて二句嫌ひてん正字

とゞ留乃字也りとかわざともう
き除き當くきくぬ入り
ぬり也り
あらわれ　かゝりわ野人山邑　邑去と邑となと安
よ二句去きし候え
間ハ　ひまを給ほ是にのさ字
と數二句嫌へしらんと
数々遣ひくハあのさりもまた
もっと句嫌ふし間字あるなれ
たわあひも同しあるひも
同し又同字あるらあるひと
くあつきしく七句去し
永き頃かく年よち放し
素の写とき後のまれ字も
同字あるしあつきあらへあと

まハ二句去て續當る也り
間去字んも續りそうり候と
て三句去　春去續らくりえ
なハ二句去之数ハ一切乃まるハ
字なん通ねよ三句去をよしと
云之文字ふしわ多数々と續
と三句去よと除もあるゝ三偏よ
くゝ除庵ゝ决り其の除よ
いつわくハ此道广きねよ汲心
傍ん乃介りてハ合点ゆく庵
りし决右よ申処のひまハ間
の字ひまを續なりし候の字
別よおまて繩句称あつさあ
以ひらんなとふハ对くゆるすり
称ぬ事あるへし地のひま雲
乃ひまなとハきゝまの串なる

まてしあつさあまり木の下ふ
よ二句をこぞあつさひまの人をと
云句ハ字までもあられてかるゝ
ときゝ給ひて定む事ぞかし

海士 人倫之部並出す

白馬乃節会（あをむま せちゑ） 正月七日

鵝鶩乃里（あさたり） 鵝らは丸き跡を みな毛まるゝわ

汗

無定積よ夜の錦よ寄せり
錦衣なれバ色よし汗ハ夜
よるきて寸痛るも又能とり
きゝくもおりなる精を生らしくても
あつさをしくも湯茶を呑く
もきこよ人のあつき物なり

或説よ汗と針ハ雑なれバ汗が
出でゝ是れを夜とゝ申すと覚し
今日人ゝを志もうあづら流るれ
熱お病の如き暑の歩る
重きを流れ出る傷寒と
云病をそ寒とうんしく出
称ろとのはさあるハ出りく
出てそ表起る温病といひ夜
も妹も名ハうちれども史熱
病者諸傷寒と素問ふあれ
とそ是を定めるし霍乱と
夜を汗出るも他乃事のふもと
ありきられを寒気中寒など
乃外ハ皆よるとす暑気の外
ゟ熱気とひくも夜になる
魚りし汲毛ふさ人夜よ云るさ

冬は汗衫なんどを夜はせんや
まゐる事はよめる也き物を着る事をとりく
せ八暖気なしとも菊もりせんや
り あつく里地の事はよき也へん
冬とも海なるはいかる乃
病者ありとも ひきうちをおほふ
しくまゐるを云ふまゐるわ

菊乃宴 を持て
宿の御事し菊の事

菊わ残りても
菊は四季にも
まほし

あり明日 村上天皇御国
二ふ 思し御国忌しらへ
菊の節 大宮の御節会月の御名目をきこ
九月九日は日大内に政在し
み意用あれと例を御事も

あるふりく比名あり夜
乃香毛を持て
霰源 霰源を見るわ

平三之